

それでも、俺が死んだら

ハイウェイのそばに埋めてほしいんだ

そしたら、俺のくたびれた邪悪な魂は

グレイハウンドバスに乗って

好きなところに行けるだろうから

「俺と悪魔のブルース」ロバート・ジョンソン

亡者幽（死んだ魂）はドラマーで、作曲者で、機械に強くて、わたしのパートナーだ。最初に出会ったのはとある夏フェス。バックステージで所在なさげにしてたわたしをいきなり口説いてきた。二人とももう出番は終わってたし、つまらないバックステージよりも会場を回ることにした。さらさらと安っぽい夜のフェス会場は最高のデートをわたしにくれた。そろそろ食べ慣れてきたフェスのご飯も、正直趣味じゃない他の出演者のステージも、全部が最高だった。

ミュージシャンという職業がそうさせるのか、わたしが特別なかはわからないけど、その時点で『この人とスタジオに入りたい』と思った。そのフェスが終わってから、わたしたちはそれぞれのバンドに戻っていったけど、隙を見つけて二人でスタジオに入った。彼女はドラムスティックだけの軽装で、にやにや笑いながらわたしの機材を眺めてた。ギターはそんなに重くない。フェンダーのサイクロンっていう掃除機みたいな名前したやつ。問題はエフェクター類だ。何をやるうとか相談せずに決めてしまったから、何が必要かわからなくて結構な量になってしまった。

スタジオに入ると、彼女は何の相談もせずにドラムを叩き始めた。見た目で想像するより遙かに重い音。わたしがギターのチューニングを合わせている最中ずっと、早くしろと急かしていた。そんなに煽らないでよ、もう。わたしの言葉はバスのドラムの音に掻き消され、

足元のエフェクターボードを見つめるわたしの表情だって伝わりはしない。

昭和の喧嘩じゃないんだからと思いつながらわたしはありったけの爆音で彼女の煽りに応えてやる。ありがたいことに、っていうかそれだけは最初から調べておいたんだけど、デツカい音を鳴らしても怒られない場所にして正解だった。

音の殴り合いが続く。

これはスタジオを出たあとで聞いた話なんだけど、彼女はクリムが好きだって言っていた。あいつらライブは映像観ても音源聴いても喧嘩してるよねそりや早々に解散するよねって例のにやにや笑いを浮かべた時に確信した。ああ、わたしはこの子とバンドを組むんだ、って。

今考えてもあの時はちよつとどうかしたと思う。何かが憑いていたのかも知れない。もつと気持ちのいい音を、もつとおかしくなるビートを。思いつきで有名そうな曲のリフを鳴らせばたまに乗ってくるし、そうじゃなければ諦めてジャムに戻る。弾きっぱなし叩きっぱなしの三時間弱、主導権はほぼずっと彼女が握ってた。

力尽きて演奏を止め、遅れてスタッフに怒られても慌てて機材を片し、外の喫煙所で休憩する。その頃わたしはまだ吸っていなかったのだけだ。

どつちが言い出したのか、実は覚えていない。本当にわたしは精根尽き果てるまで弾ききった後で、彼女も一見余裕そうに見せてはいるけど顔に疲れが滲んできた。だからそれは言葉に出来ないっていう使い古された言葉でしか表現できないような共感で、お互いの目を見るだけで通じていたのかも知れなかった。

それからすぐに、わたしたちはそれぞれのバンドを辞めた。それまでのわたしたちはお互いのバンドを聴いていなかったし、そもそ